放課後

田中由紀江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後

【Ｎコード】
Ｎ００７０Ｑ

【作者名】
田中由紀江

【あらすじ】
澪は、最近律のことが気になっていた……。
私たちは、幼馴染でずっと仲が良かった。だけど、最近それだけじゃなくて、律のことを恋人みたいに意識することが増えてきた。

（前書き）

私は女性ですが、けいおん！のことを弟から教えてもらいました。
登場する少女たちが、とてもいきいきしていて、可愛いと思います。
そして、何となく、けいおん！の小説を、書いてみることにしました。
少しでも楽しいと思っていただければ幸いです。

～プロローグ～

あれは、いつのことだったろう。
私と律は、幼い指を絡めて、そして約束した。
「ずっと、一緒にいようね……」

第一章　澪のゆううつ

「わぁ、今日も美味しそ～～！」
唯が思わず歓声を上げる。
ムギの持ってきた今日のお茶菓子は、イチゴのショートケーキに、クリームたっぷりのエクレアにシュークリーム。どれをとっても、女の子が大好きな洋菓子ばっかりだ。
「はい、澪ちゃん」
「あ、ありがと」
私も、ムギからミルクの入ったイギリス製の紅茶のカップを受け取った。
「あぁっ、こういう瞬間が、いっちばん幸せだよなぁぁ、ミルクティー飲みながら、このっ、生クリームたっぷりのケーキ……♪」
「律っ、行儀が悪いぞ！　もう」
私は、口の周りを生クリームでいっぱいにしながら、ショートケーキを大口開けて頬張る律に注意した。しかし、私がそんなことを云ってみたって、律はまったく聞く耳なんかもたない。
「澪も～、食べてみな、このケーキ。おっいし～～」
「ったく……、もう」
なんて云いながら、私も、真っ赤に熟れたイチゴをフォークで突き刺す。唯も、目をキラキラさせてシュークリームの味に感動して

いるようだった。
「うん、美味しいよ、このシュークリーム。生クリームとカスタードクリームが両方入っててサ・イ・コーッ！　ね、あずにゃん」
「は、はい……」
いつも真面目な下級生の梓は、唯や律のあまりのテンションの高さに、ちょっと困惑ぎみのようである。
そして私はというと、行儀よくケーキについてるラップを剥がし、生クリームたっぷりのケーキにフォークを入れて……、それから、思わず口から出た言葉は、自分でも驚くようなものだった。
「律、今日練習終わったら、あいてる？」
「え？」
律は、目をぱちくりさせた。
「そうだなー、あいにくと、今日は聡とちょっと買い物に行く予定になってるからあいてない。何か用？」
「あ、ううん、ならいいんだ……」
「どしたの？　澪ちゃん」
唯がいつものほんわかした調子で、私に問いかけた。
「リッちゃんと二人で、何かしたいこと、あるの？」
「ううん、別に……」
「そんなら訊く必要、ないじゃないですか」
梓が口をはさんだ。
「それにしても最近の澪先輩、何だか変ですよ。急に、ボーーッとして考え込んじゃったり、何だかうわの空だったり……、何かあったんですか？」
「そ、そんなことないだろ……」
「ひょっとして、澪――」
律がニヤニヤと笑った。
「好きな男でも出来たんじゃないか？」
「何云ってんだよ。そんなわけないだろ。大体女子高行ってて、男の子とは縁がないっていうのに」

「でも澪、可愛いからモテるもんなあ。――好きな男出来て、私にラブレターの橋渡ししてくれ、なんて云うんだったりして……」
「違うったら！」
知らないうちに私はムキになっていた。
「好きな男なんて、いるわけないだろ！」
そう云いながら、顔が赤くなるのが分かる。
「おっ、初々しいねぇ、澪ちゃん」
立ちあがった律が、ぐりぐりと私の頭の上で肘をまわす。
「そうやって、少女は大人になっていくもんですよ。うりうり」
「違うっていってんだろッ！」
思わず、私は律の頭をゴツンッと叩いてしまった。律の頭に、大きなコブが出来あがる。
「どうも、しぃましぇん……」
座り込んでコブを抱え込んでいる律を見てから、ハッと冷静さを取り戻した。
「ご、ごめん、律。ダイジョブか？」
私が、真面目な顔で律に云うと、律は、立ちあがって、
「ダイジョウビ！」
とピースした。
「あはは、りっちゃんったらぁ」
唯やムギが笑い、梓も、心もち手で口を隠しながら笑っていた……。

＊

「じゃあなぁ、唯、澪！」
「じゃあねぇ、りっちゃん！」
「さよなら」
唯や律と別れてから、私は独り家路へ向かいながら――そう、思

わず吐息をついた。
私は、やはり、心の奥深く傷ついていたのかもしれない。
何故かというと、それは律が――
（この想いは、やっぱ、ヤバいよな……）
何故、律にこんな気持ちを抱くようになったのだろう。
律とは、ずっと小さいときからの幼馴染で、幼稚園から一緒で、いつも共にいて……。何だか、いつしか自分の一部みたいに感じるようになっていた。
一緒にいることが当たり前過ぎて、それが普通で――何だか、律がいない日常なんて考えられなくなって……。
そして、いつしか私は、律の後ばかり追うようになっていた。
（律……）
もし、同じ女でありながら、律に特別な感情を抱いていることが知られてしまったら――やはり、私が想像するように律は私を毛嫌いするようになるのだろうか？
（嫌だ、それだけは……）
私は、涙が出そうになった。目の前の信号が赤になるのを見て、思わず止まりながら、私は少し泣いてしまった。
（律……、私は一体、どうしたらいいの？）

第二章　失態

次の日――
空模様は、私の心と同じように、雨だった……。
「では、この場合、Xかけるyの二乗について……」
苦手な数学の授業。思わず、心は他のことへと飛んでしまう。
斜め前方に見える律の背中。――その背中を、思わずじっと見つめてしまう……。
（律……）
私は、やはり律のことが好きなのか？！　だが、私は一体、律を

どうしたい、と思っているのだろう。或いは、どうされたい、と……？！

だがそんなことは、やはり私にはよく分からない。分かるのは、律のことが好きでたまらなくて、ずっと、ずっと一緒にいたい……、と思うこと、それだけなのだ。

だけど、律は、おそらくそんなことはないだろう。昨日の反応を見ても、律は、私が男の子を好きになったって全然嫉妬したりしないだろうし——きっと、私が彼氏をつくってもただただ無邪気に喜ぶだけかもしれない。でも、私のほうは、律に彼氏でも出来たら、おそらくそういうわけにはいかない……。

一体、どうしたらいいのだろう？　この想いが自然と塵のように雲散霧消してしまうまで、ただ、やり過ごしていくしかないのだろうか……？

（律……）

「——では、秋山さん、次のページを読んで」

ボーッとしていることを知られてしまったのだろうか？　数学の先生が、私にいきなり声をかけた。

「あっ、はい……、えっと、あれ……？」

私は、慌て過ぎて、思わず蟹みたいに泡を吹きそうになった。

「百十三ページですよ」

先生が、そう声をかけると、慌てて青くなっている私のほうを見て、クラスメートたちがクスクスと笑っていた。目の端に入った律の顔は、キョトンとしたように振り返って私の方を見ている。

「えっと……、次の式は、Ｙの二乗、かっこかける……」

問題を読み上げながら、私は、ひどく狼狽していた……。

＊

「あーあ、今日はおかしかったなぁ、澪は」

放課後、いつものように音楽室でお茶しながら、律は心底愉快そうに笑っていた。
「先生にさされて、青ーい顔して……、教科書、ぺらぺら……」
「いい加減にしろッ！」
また、肘鉄をくらわしてしまう。律は、それでも全然めげてない様子で、頭を押さえて立ちあがりながら、
「澪ちゅわん、一体何を考えてたんでちゅか？」
なんて、おどけて云った。
「別に……、何にも考えてなんかないよ」
私は、クールにそう云う。
「本当かなぁ」
「……」
「そだ。思春期真っ盛りの澪ちゃんに、いーものあげよう。ほれ」
と云って律が差し出したのは、何と、人間のしゃれこうべ。
「ひゃあぁぁぁッ！」
私は、思わず大きな声を出した。
「このしゃれこうべ、満月の夜になると話しだすんだって。例えばこんなふうに。
『お～ま～え～の目をくれぇっ』」
「やだーーっ！」
私は律のそばから飛びすさった。
「見えない、聞こえない、見えない、聞こえない……」
背を丸めて座り込み、がたがた震えながら小さく呪文のように唱える。
「あらあら」
「大丈夫ですよ、澪先輩」
梓が、そう云って私のそばに座った気配がした。
「あれは作り物だし……、全然、怖いことなんかないですから」
そう云って、私の頭を撫でこ撫でこ、する。
「澪ちゃん、下級生に慰めてもらってるぅ」

唯がいきなり云った。
「なんか、上級生の威厳、全然ないね」
「唯ほどじゃないだろ」
私は、思わず振り向いて云ってしまった。だって、唯は下級生の梓に、いっつもギターの弾き方、習っているし……、妹の憂ちゃんにも、まるで姉と妹が逆みたいにお世話になってるし……、そんなやからに上級生の威厳がない、などと云われたくはない。
すると、
「でも、いいんじゃないかしら」
と、ずっと黙っていたムギが云った。
「下級生がしっかりしてたら、お世話になるのも悪くはないんじゃないかしら。だって、年上だからって、必ずしも年下の面倒みなきゃいけないわけじゃないと思うの」
「一理ある」
律が、こくんとうなづいた。
「年上が年下に頼りたいことだって、あるよなぁーー」
「そうだな」
話題が、いつのまにか私の今日の失態の理由から離れていることにホッと胸を撫でおろしながら、私はそう云ったのだった。

第三章　驚嘆

（年上が必ずしも、年下の面倒を見なければならない、というわけではない……）
その言葉は、何だか凄く私の胸のなかに残った。
よく考えてみれば、律だって私よりも三カ月以上年下だし、今までは、確かに私のほうが律の面倒を見るお姉さん、みたいな役割をしてきたような気もするけど、私のほうが律に頼ってみてもいいわけだ。
はっきりいって性質的には、律のほうが断然、頼りがいありそう

って気もするし……、私は、案外古風（？）な女のタイプだから、やっぱり自分のほうが頼るっていうほうが、ずっと心に叶うって気がするのだ。

でも、女同士で頼る、とか、頼られる、とかって、ちょっとおかしなカンジも、やっぱりしちゃうけど……。

そりゃ、私だって男の子は好きだし、男の子に守ってもらうことに憧れちゃう気持ちも凄くある。でも、私のそばに今、いてくれているのは律で……。だから、律にそれを求めてしまっているのだろうか？！

律が好きって思っちゃう自分の気持ちを、何だか止められなくて……、今、女子高にいるってことも手伝って、律への熱い気持ちは、どんどん広がってしまっているってカンジするんだけど、だけど、やっぱり気になるのは、律のほうは私のことをどう思っているのか、ってことだ。

律は、私のことをどう思っているのか……？！　これは、私のなかではかなり重大な問題だ。律が私のことを、私が思っているのと同じぐらいに好きって思ってくれてたら、そりゃあ、飛びあがっちゃうぐらいにきっと、嬉しいだろう。だけど、いくら幼馴染とはいえ、律がそこまで私のことを思ってくれているかどうか……。それって、私と律みたいにすっごく仲良くっても、多分、すっごく確率って低くなるのじゃないかなぁ……。

私は、すごく律が好きだ。多分、もし高校を卒業して、他に好きな男の子とか出来て、すっごく愛しあうようになったりしたとしても、やっぱり、私にとっては律は大事で、とっても特別な存在だろうって思う。

私は、律が好き――それは、本当に心の底からそうであって、きっと、いくら男の恋人が出来たり、結婚したりしたとしても、絶対変わらないことであるだろう、と思うのだ。

（律を、愛している……）

なんて思うと、何だか照れてしまうけど、でも、それは決して変

わらずにこれからも続いていくような気持ちであって――
「澪！」
「ひゃあぁぁ！」
後ろから、いきなり抱きつくようにされて、私は驚いて飛びあがった。
「澪ったらァ、またボーーッとしてたのかぁ？　最近、いっつも考え込んでボーーッとしちゃってる気がするけど、何か悩みでもあんのかぁ？」
「……」
プルプル、と私は首を振る。
「でもぉ、それも澪らしいって気はするけどな」
「……」
私は、思わず赤面してしまっていた。今まで考えていたこと、律に知られたらやっぱり恥ずかしいもん。知られる手立てはないだろうけど。
「どうしたぁ？　やっぱ、何か、変だよなぁ。最近の澪ちゃんは」
「そ、そんなことないよ」
「そうかぁ？」
律は、私の顔をじっと覗き込む。
「みーお、大好きだよ♪」
なんて律がいきなり云いだして、私にキスするように顔を近づけてきたので、私はすっごく驚いた。
「わあぁぁぁ！」
私は真っ赤になり、手を振りまわしてたじろいだ。
「冗談だってば！　ったく、澪はホントに肝っ玉小さいよなぁ」
「そ、そういう問題じゃないだろ！」
私は、まだ赤くなっているほっぺを撫でさすりながら云う。
「ちょっとのことで、すーぐ、驚いちゃうんだから、澪は。ホント」
そういうと、律は、面白おかしそうにニヤニヤと笑った。
「なんか、私に用、あったんじゃないのか？　時間あいてるか、な

んて云ってた
けど」
「別に……」
私は、今度はちょっと青くなって首を振る。
「別に、大したことじゃないんだ。明日、学校で、でいいよ」
「あ、そう？　そうなら、いいけど」
そう云うと、律はちょっと考えるような表情をした。
「とにかく、私、ちょっと今から用事あるから」
「そっか？　じゃ、仕方ないな」
腑に落ちぬような顔をしながら、律はそう云って、少し気落ちしたような感じも
したけど、すぐ元気印の彼女に戻って手を振った。
「じゃあ、明日、学校でな」
「うん、じゃあな」
律と別れてから、私は、思わずフウッて吐息をついた。まったく、心臓に悪い。
何でこんなに私をびっくりさせるんだ、ったく、律のヤツは！

＊

自分の部屋に戻ると、何だかとても落ち着いた……。
今は、何だか、独りでじっと考えたい気分だった。
私は、もともと文芸部を志望したりするぐらいだから、どっちかといえば、おしとやかで読書や作文なんかをしてるほうが好きなんだ。それが、何を好きこのんで軽音部なんかに入ることになったのか……？！
それは、ハッキリ云って、やっぱり律のせいなんだからな、ホントに。
多分、律にあんなふうに強引に誘われなければ、きっと軽音部な

んて入っていなかっただろうって、私思うんだ。
だけど、それは、起きてよかったハプニング！　律のお陰で軽音部に入って、そしてそのお陰で、私は唯たちとも知り合えたし、バンドを組んで活動するなんて、独りじゃ絶ッッッ対にしなかっただろう、大きなことをすることもできた。しかも、私が作詞した歌詞が本当に曲になって、その曲を私がボーカルとして歌うことになって、しかも――パンツ見られたのは、すっごく恥ずかしかったけど――そのせいで私のファンクラブ、なんてものまで出来ちゃって！！
それを思うと、やっぱ、律のパワーって、凄いなって思うんだ。ハッキリ云って、律は私の幸運のエンゼルっていうか――なんか、そんなカンジってすごくある。
私は、律にいつも振りまわされるけど、その結果は、いつも素晴らしいラッキーなことにつながっていたりして。
そして、思う。律と、ずっといつまでも一緒にいたいなって。律が大好きだって。
律は、私にないものを全部持ってる、すっごく大切な人だって。
だからやっぱり、私は、すっごく律が好き……、私、やっぱり、そう思っちゃうんだ……。

第四章　愛

「わぁっ、今日はマドレーヌかぁ」
ムギの持ってきた高級そうなマドレーヌを見て、律は歓声を上げた。
「私、紅茶、いつものようにミルクと砂糖少々」
「わかってるわ」
いつも、ムギはニコニコしながら、皆に美味しいお茶を淹れてくれる。
「それにしても、澪、私に用事って、結局一体何だったんだよ」
律は、私の顔を何度も覗き込むようにして云った。

「あ、ああ、それは……」
「リッちゃん、澪ちゃんを追い詰めちゃダメ」
唯が、私をかばうように云う。
「澪ちゃんは、きっと、リッちゃんを愛してるんだ。――だから、そのことを、きっと言葉で伝えたかったんだよ」
ブッ……！　と、私は口に含んでいたお茶を吐きだした。
「な、何を……」
目を白黒させる私に、梓が追い打ちをかけるように云う。
「そんな分かりきったこと、云っちゃダメですよ。澪先輩が律先輩を好きなことなんて、傍から見てたら、バレバレじゃないですか」
「なっ、なっ……！」
私は、泡を食ったようにわなわなと震える。すると、後からやってきていつのまにか、お茶を飲んでいたさわちゃん先生までが云いだした。
「女子高にいると、そんなのは珍しくないわよね。昔は、あたしだって――」
などと、メルヘンめいた目つきをする。
「おそらく、律先輩も、澪先輩のことが好き。二人とも、両想いですね」
「おおっ、おめでとう！　リッちゃん、澪ちゃん！！」
「なっ、何を云ってんだッ！」
真っ赤になって私が云うと、
「おうっ、ありがとう！」
と、律が手をあげてまるで選挙に立候補でもしたみたいに云った。
「おまえは、簡単に調子合わせてんじゃないッ！」
「いいんだよ、澪」
怒鳴った私に、律は振り向いてチッチッチッと右の人差し指を振った。

「私たち、すっごく似合いのカップルだと思うよ。澪は、ある意味私にとって、運命の人なんだからな」
「律……」
急にマジな調子になった律の言葉に、私の胸は震えた。
「愛してるぜ、澪。じゃあッ、久しぶりに練習いくかァッ！」
「オーーッ！！」
皆、盛り上がって席を立つ。
「澪、後でラブラブな時間、過ごそうな」
耳に囁くように云ってきた律の言葉に、私は思わずうなづいた。
「――うん」
その日の練習と放課後は、とっても、ｌｏｖｅｌｏｖｅ、な調子に満ちていた……。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0070q/

放課後

2011年1月7日10時55分発行